

31文字で表現する「叙情の世界」

敦賀の短歌グループが集まり、今年で結成19年目

新元号「令和」の典拠となったことから、万葉集が注目を集めたのは記憶に新しいところです。万葉集は中国の漢詩に対する日本固有の「やまとうた」のことで、短歌や長歌、旋頭歌など4500首以上の歌が収められています。なかでも、五七五七七の調べを持つ短歌は愛好家が多く、敦賀では『敦賀市短歌人会』という市民グループが活動を行っています。

同会が結成されたのは平成12年。「それ以前は短歌の小グループが個別



竹内さんが所属する「珠藻歌話会」は昭和53年発足現在は月に1度、定例会を開催しています

に活動していましたが、それらがついにまとまり、合同歌会などの活動を行うようになったのが、始まりです」と話すのは、同会3代目会長を務める竹内展子さん。

敦賀市短歌会に参加する小グループには、竹内さんが所属する珠藻歌話会をはじめ、中郷短歌会、つるが短歌会などがあるほか、全国に支部を持つ「塔短歌会」や「アララギ」のメンバーとして活動する歌人もいます。会が結成されて以降は、グループ同士の交流が盛んになり、創作発表の場も広がっています。

色紙展や短歌大会などさまざま活動を展開

今年で結成19年目を迎える敦賀市短歌会の活動の一つが、毎年開催している色紙展です。会のメンバーが自作の短歌を色紙に表現して展示するもので、今年は5月14～19日まで30点の作品が市内のギャラリーにて披露されま



今年5月に市内のギャラリーで開催された敦賀市短歌会色紙展。30点の作品が展示されました

した。色紙に直筆で書かれた短歌は、その筆致にも個性が表れ、それぞれの歌の世界観をより深く感じられました。

同会では、敦賀市合同短歌大会も開催しています。今年は6月7日に敦賀西公民館で実施。選者を「未来」同人で、福井短歌人連盟役員、朝日新聞若越歌壇選者を務める紺野万里氏にお願いし、それぞれが持ち寄った短歌を披露して感想を述べ合い、優秀作品を選出しました。

その時々々の感動をすくいと、みんなで一緒に分かち合う

短歌を歴史的に見ると、アララギ派をはじめ、時代ごとに特色のある会派が生まれています。「平成に入り、そ



今年6月に開催された敦賀市合同短歌大会の様子

の流れを大きく変えたのが、俵万智さんの登場です。俵万智さんが表現する楽しく軽やかな歌の世界で、短歌がより親しみやすいものになりました」と竹内さん。その時々々の感動をすくいと、歌にするのが短歌の楽しさだと話します。自分が感じたことを五七五七七の調べに乗せて、みんなに聞いてもらい、一緒に感動を分かち合う。その喜びが、会としての活動の醍醐味であり、長年にわたり活動を続けてきた原動力にもなっているようです。

「短歌は31文字で表現する叙情の世界」という竹内さん。感動する気持ちを忘れず、みずみずしい感性を持ち続けられる短歌の魅力を伝えてくださいました。

●敦賀市短歌会へのお問い合わせ
代表／竹内氏

TEL 090・6810・6222